# 「黄昏どき、神と共にある」

## ～神に出会うのに遅すぎることはない～

ヨハネによる福音書1章35～39節　讃美歌167、215

***35 その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。36 そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。37 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。38 イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まっておられるのですか」と言うと、39 イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。***

イザヤ書40章9～11節

***9 高い山に登れ／良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ／良い知らせをエルサレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな／ユダの町々に告げよ。見よ、あなたたちの神 10 見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られ／御腕をもって統治される。見よ、主のかち得られたものは御もとに従い／主の働きの実りは御前を進む。11 主は羊飼いとして群れを養い、御腕をもって集め／小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。***

## ■　本論

新しい年を迎えました。この2022年の歩みもまた主の御守りのうちにあるように祈りを合わせたいと思います。

流れゆく時の中にあっては、12月31日から1月1日に日が移るということには、大きな意味はないのかもしれません。動物たちは、その意味を知らないでしょう。空の鳥も海の魚も、寒くなる、暖かくなる、そういう季節の変化を知っていたとしても、あるいは朝には光が満ちて、夜が暗闇を世界を覆うということを知っていたとしても、その変化に特別な意味を見出すということはないでしょう。

時を刻みながら、そこに暦をつくり、さらに特別な意味を見出す。

それは人間だけが成す、人間だけに与えられた特別な賜物であるようです。

私たちは新しい年に導かれ、やはり新しい思いにさせられる。

この年こそはであれ、この年もであれ、神様の御守りを切に願う。

そういう「時」の感じ方をゆるされています。

そして、今、わたしたちが読み進めていますヨハネによる福音書も、そのような時の刻み方にとても注意を払う福音書でした。

今日、お読みした最初のところに、こうありました。「その翌日」。

その前にもありました。29節、「その翌日」。

この後にもあります。43節、「その翌日」。

こうして、ヨハネは、1章19節から2章11節までを一週間の出来事として記していきます。それは明らかに、創世記の冒頭に記されています天地創造の一週間に重ねられてのものです。聖書は、神様がこの世界を創造なさる様を一日一日と時を刻み

記していました。それは今、わたしたちが考えるような 24 時間という一日ではなかったかもしれない。まだ、太陽も月もない中での一日です。それでも、神の御手の中で一日一日と時が刻まれ、そうして世界は成ったのでした。神が極めて良いと言われた世界がつくられたのでした。
　その神の御手の中にある一日一日に重ね合わすようにしまして、ヨハネは、イエス様がこの世に来られた、そして神の子としてのお働きを成していかれる、最初の一週間を記します。それは、この神の子イエスによって、世界は新しく造られる、救いという名のもとに、再創造される、そういう意味をここに刻むためです。

　今日、お読みしたところは、その三日目の出来事でした。天地創造で言いますと、地上の世界が海と陸地に分けられまして、大地には草が、そして実のなる木が生え出でる。少しずつ人間の住むことのできる世界ができつつあるという日です。

　この三日目の出来事のなかにもう一つ小さな時間が刻まれていました。39 節です。
　***そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。***
　もちろん、イエス様も弟子たちも時計を持っているわけではありません。
　太陽の傾き加減からそう判断されたんでしょう。
　午後四時（ギリシア語では「第十の時」）とはどういう時間でしょうか。
　日没が午後六時です。午後六時を日没の時間と合わせる。
　そこから考えますと、午後四時というのは日没前の夕暮れ時。黄昏どきです。
　まだ、暗闇が世界を覆い尽くすギリギリ前、世界には光が残っている。
　それが、午後四時という時間でして、ヨハネは、そこに大切な意味を見たのです。
　今日は、その午後四時に至る三日目のお話です。

　舞台は引き続き、洗礼者ヨハネが人びとに洗礼を授けていましたヨルダン川の向こう側、人里離れた荒れ野です。
　そこで、ヨハネは、二人の弟子と一緒にいました。
　一緒に歩いていたんでしょう。
　歩きながら、神様について、真理について教える、語り合う。
　それが、師匠と弟子との、いわば修行の在り方でした。
　そこに、イエス様が通りかかるんです。
　そのイエス様を見て、ヨハネは言いました。「***見よ、神の小羊だ***」。
　思わず口をついてでてきたような言い方です。ぎこちない感じはありません。
　ずっと、ヨハネの心の中で反芻されていた言葉のようです。
　その言葉は、前回のところにもでてきていました。
　29 節、「***見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ***」。
　この言葉の背後にありますのは、エルサレム神殿に献げられる犠牲の小羊です。
　神殿にいる祭司は、小羊を祭壇に献げることで、神様からの憐みと赦しを祈り願ったのでした。ヨハネは、イエス様を見て、自分たちを守ってくれる、また、自分たちの罪、神様に対する罪を担ってくれる小羊なんだと、すなわち、彼こそ待ち望んでいた救い主だと、そういう言葉を発したということです。

ヨハネは、見つめていたんです。イエス様が何者であるのかを。
イエスは、世の罪を取り除く神の小羊だ、私たち人間の罪を担う神の小羊だと。
人びとは自分のことを救い主のようにあがめる。
しかし、決してそうではない。あの男だと。
あのイエスが、神の小羊。神にその身を献げる救い主であると。
ずっと心の中にあった言葉が、ちょうど目の前をイエス様が通り過ぎていくものですら、口をついて出たんですね。

その師匠の言葉を、二人の弟子は聞き逃しません。
師匠の言葉を確かめるように、二人はイエス様についていきます。
いくらか道を進んだ頃でしょうか。もう一度39節. ***イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。***

イエス様もなんだろうと思われたのかもしれない。二人は、ヨハネの弟子なんです。
その弟子が、自分についてくる。何だろうと。「何を求めているのか」と。
それに対して、二人の弟子の応えはちょっと不思議というか強引ですね。
***「ラビ――『先生』という意味――どこに泊まっておられるのですか」***

この辺りは人里離れた荒れ野ですから、家があるわけではない。
岩の陰や洞窟みたいな場所を寝床にされていたんだと思います。
それはどこですかと。じっくりとお話を聞かせてくださいと言う。

そうしますと、イエス様は、***「来なさい。そうすれば分かる」***と言われまして、おそらくはかなり長い時間、長い距離を歩かれたんだと思います。
夕暮れ目いっぱいまで、この日一日をかけて歩かれたんだと思います。
どこまで、ついてくるのか、ついてこれるのかという根競べみたいな感じもします。
時々、イエス様が走り出して、二人をまこうとしたなんて想像をすると楽しいものです。が、実際はそんなことはなくて、お話をされながら歩かれたんだと思います。
神様について、真理について語り合いながら、歩かれたんだと思います。
そして、ヨハネの弟子であった二人は、イエス様の弟子になっていきます。
それがヨハネの役割でもあった。イエス様へと橋渡しをすること。
***そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。***
ギリギリ夜になる前に、光のあるうちに、二人はイエス様の弟子になった。
これが、三日目の出来事として、ヨハネ福音書が記すことです。
ヨハネ福音書は一貫してそうなんですけれども、ある出来事を極めてシンプルなかたちで記します。ここでも、イエス様と二人の弟子が一緒に歩いている間に交わしたであろう会話は一つも記されていません。出来事をシンプルなかたちで記す。
そう記しながら、そこで用いる言葉によって、そこには実はこういう意味があったんですよ、いわば神様の神秘がそこにあらわされていたんですよ、ということを言う。
それが、ヨハネ福音書の文章です。そこに、古代より、ヨハネ福音書が霊的な事柄

を記す書物と言われる所以があります。
　ですから、この福音書を読むときに、いつも大切なことは、ある出来事に、ヨハネによる福音書がどういう意義を見出しているのかということをちゃんと追いかけるということです。そう読むことを、この福音書は求めています。

　今日のところではどうでしょうか。二つのことを抑えましょう。
　一つは、38 節です。イエス様にずっとついていく二人の弟子です。
　その二人の弟子が、イエス様に「何を求めているのか」と問われまして、こう答えたというんです。*「ラビ―『先生』という意味―どこに泊まっておられるのですか」。*
　イエス様はどこまでも歩いていかれそうですので、弟子たちは素朴にそう思っただけかもしれない。どこまで行かれるんだと。
　しかし、その問いに、ヨハネ福音書は大切な意義を見出しています。
　ポイントとなりますのは、「泊まって（μένω）」という言葉です。
　この言葉は他に、「留まる」ですとか、「つながる」という意味を持っています。
　あるものとあるものとが接触している、一度くっついたら離れないということをあらわす言葉です。この言葉を、ヨハネ福音書はよく使うんです。好きな言葉なんです。
　特に、ヨハネによる福音書 15 章は、この言葉が散りばめられています。
　イエス様が「わたしはまことのぶどうの木」と言われるお話の中で、「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」（4 節）と言われます。この「つながる」という言葉です。あるいは、その同じ 15 章で、「わたしの愛にとどまりなさい」（9 節）と言われる「とどまる」という言葉。さらには、「あなたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと」（16 節）と言われる、「結ぶ」という言葉。
　いろんな翻訳がなされるんですけれども、ヨハネは神と人とが結びついて離れない、神が人を結び合わせるという時に、この言葉はキーワードのようにして使われます。

　その言葉が、ここでは「泊まって」というふうに訳されて使われています。
　わたしたちは、だんだんと、この福音書が求める意味に近づいています。
　もう一つ見ましょう。今日、お読みした直前の箇所です。
　洗礼者ヨハネの言葉です。正確には、洗礼者ヨハネが受けた啓示の言葉です。
　33 節です。*わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。*
　ここに「とどまる」という言葉がでてきました。それが、今日の所で「泊まって」と訳されたのと同じギリシア語です。*『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』。*
　神の霊がある人にとどまる、泊まっている。そう見つけられたなら、その人こそ、「*聖霊によって洗礼を授ける人である*」。
　洗礼者ヨハネはそういう神の啓示をうけまして、そして、34 節。*わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである*ということでした。
　証ししたわけですから、二人の弟子は聞いていたということでしょう。

そのことを受けての「***ラビ―『先生』という意味―どこに泊まっておられるのですか***」ということですから、二人の弟子が確かめようとしたことは、単に、イエス様が今日、どこで寝るんだということではない、ということになります。
彼らは、洗礼者ヨハネの言ったことを忠実に確認しているということになります。
つまり、聖霊は、どこにとどまっておられるのか。
あなたを、救い主であると証しすべき、聖霊はあなたのどこに見つけられますか。
それが、弟子たちの問いの意義であったと、ヨハネは記しています。

ですから、イエス様は言われます。「来なさい。そうすれば分かる」。
この「分かる」という言葉は、もともと「見る」という言葉です。
イエス様も、洗礼者ヨハネが受けた神の啓示をご存じであるようです。
***“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら***という啓示を。

だから、来なさい。そうすれば分かる。そうすれば見る、と言われる。
イエス様は招かれるんです。来なさいと。こっちに来なさいと。
この「来なさい」という言葉も、この福音書が大切に使う言葉です。
これからまた学んでいきますけれども、この「来なさい」という言葉は、ほとんど「信じなさい」と同じ意味で使われていきます。
イエス様が、わたしの方に来なさいと言われる場合は、わたしを信じなさい、わたしを信頼しなさいという意味です。
来たら分かるんです。信じれば見えるんです。
逆ではないですよ。「来なさい。そうすれば分かる」んです。
信じなさい。そうすれば見えるんです。イエス様が救い主であると。
これは決定的に重要なことです。
まず、信じるということ、信じたいということが先にある。
その思いもまた神様から与えられた恵みです。
しかし、そのことさえも、そう知ることは後でいい。
まず、信じるということ、信じたいということへと身を投じることです。
わたしたちはともすると、何かを学び、知識を積み重ね、これで大丈夫だと安心してから信じましょうという態度をとります。
神様に対して、そんな不遜な態度はないのです。
神様は、イエス様は、人間に品定めされるようなお方ではない。
知っても、知っても、知り尽くすことができないお方です。
学んでから、知ってからでは、日が暮れてしまいます。
イエス様は、「来なさい」と招いておられる。「そうすれば分かる」と言われている。
ですから、行くんです。信じるんです。二人の弟子たちはそうしました。
***そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。***
彼らは信じて行った。そして、見たんです。
イエス様がどこで寝起きをされているのかを見たんでしょうし、イエス様に聖霊がとどまっておられる。この方が待ち望んでいた救い主だということが分かった。
ですから、二人の弟子はそのまま、***イエスのもとに泊ま***りましたし、とどまった。

イエス様と共にあって、神様に結び合わされたんです。

二人の弟子がイエス様についていったからです。

「来なさい」と言われて、そのまま信じてついていったからです。　そこで、彼らもまた見たのです。洗礼者ヨハネが見たように、***この方こそ神の子である***と。

それが、午後四時ごろのことであった、ということです。もう日暮れは近い。午後四時ということは、随分と時間がかかったということをあらわしているのでしょうか。

どうやら二人の弟子は、すんなりと信じられたわけではないようです。

見られたわけではないようです。師匠である洗礼者ヨハネの言う通りに、イエス様についていきましたけれども、この日は長い一日であったようです。

でも、間に合いました。間に合うんです。そして、間に合えば同じです。

朝日が昇る時であっても、太陽が頭の上にある時でも、日暮れ間近であっても、「来なさい」というイエス様の言葉を信じてついていく。

そこが、その人に定められた「時」です。神様が備えられた「時」です。

その「時」のために、わたしたちの全生涯が用いられます。

イエス様は後にこう言われます。「***暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。……光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。***」（12 章 35,36 節）

２０２２年の歩みが始まりました。

この一年がどういう歩みになるのか、誰にも見通せません。

しかし、ただ一つ確かなことは、私たちは光のなかを歩むということです。

暗闇は内からも外からも、私たちは覆い尽くそうとします。

しかし、私たちが歩むのは、光のなかです。

私たちに求められていることは、信じることです。

イエス・キリストを信じることです。

この方だけは暗闇に覆われることはない。光のなかに留まっておられる。

その方が、来なさいと言われています。そうすれば分かると言われています。

であるならば、歩むのみです。信じるのみです。

そうすれば分かるんですから。その証を共にする一年となりますように。

お祈りをいたしましょう。

■　***祈り***

***7 あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8 あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。9 父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。　ヨハネによる福音書 15 章***

■　***静止の時***

『子どもと親のカテキズム』

問３４　イエスさまがなしとげてくださった救(すく)いは、どのようにして私(わたし)たちのものとなるのですか。

答　私(わたし)たちは自分(じぶん)の力(ちから)で救(すく)いを手(て)に入(い)れることはできません。ただ聖霊(せいれい)なる神(かみ)さまの働(はたら)きによって、救(すく)いは私(わたし)たちに与えられ、私(わたし)たちのものとなります。

イエス様は、今からおよそ2000年前のエルサレム、ゴルゴタの丘と呼ばれる場所で十字架にかかってくださいました。人間の罪をすべて担われて、わたしたちが負うべき神の怒りを何も残さないかたちで、イエス様は十字架にかかってくださいました。

それが、イエス様が成し遂げられた救いの御業です。

しかし、そのままでは、それはイエス様の救いであって、私たちの救いにはなりません。

イエス様と私たちを結びつける。イエス様の救いを私たちの救いとする。

それは、聖霊なる御神の働きによるものです。私たちが自分の救いを知るとき、イエス様に救われたと思えるとき、そこには聖霊の働きがあります。

その意味で、救いは三位一体の神のお働きであると言えます。

父なる神様の求められることを御子なるイエス様が成し遂げられ、その救いを聖霊がわたしたちのものとして結び合わせてくださる。

聖霊は、私たちをイエス様と結びつけてくださる接着剤のような存在です。

一度くっついたら二度と離れることはできない、そういうご存在。

この一年の歩みが、三位一体の神の導きに守られていくものであることを祈ります。